
「一輪の白い花」

AKIRA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「一輪の白い花」

【Nコード】

N1143A

【作者名】

AKIRA

【あらすじ】

思い出の海から始まる、少し悲しい物語。主人公は医者であり、彼女を助けようと奮闘する、しかし、無情にも病魔に侵された彼女を助けることは出来なかった……。そして、風のイタズラにより、死んだ彼女に逢うこととなる悲しくも心温まる物語。

砂浜にそよぐ風を、体前面に受けながら、ゆっくりと海原へと歩いていく。

波際で立ち止まった私は、思い出のこの場所で目を閉じた。

「ねえ、俊。私がもし死んだら、この場所で、私のこと思い出してくれる……」

砂浜に座り、ただ遠くを見る僕の目は、彼女を直視出来ずにいた。

彼女は僕の隣に座り、頭を僕の肩に乗せ、声を出すこと無く、泣いていた。

風の音と共に、場面が次々に浮かんでくる。

「執刀は、僕がすることになったよ。心配しなくていい。俺が必ず治してみせるから」

深夜、病室を訪れ、明日の手術の執刀医が、私であることを告げると、優しく微笑み、

「お願いします」と小さく頭を下げ。痩せた手で僕の頬に触れ、彼女はもう一度、小さく微笑んだ。

不安な気持ちを少しでも静めてあげようと、僕は彼女を抱きしめ、そしてキスをした……。

そう最後のキスを。

「メス・・・」
発した言葉が、まるで自分の言葉ではないように感じ、メスを受け取った。
刃先が皮膚に触れる感触、今まで、何百とこなしてきた執刀であるはずが、まるで最初にメスを握った時の様に、心拍数が上がっている。

1時間が経ち、2時間が経ち、時間が経つにつれ、治すと発した言葉の重荷を感じていた。
癌細胞の広がりが増え、各内臓の動脈と静脈の間まで入り込んでおり、私は神経を張り巡らせてつ、メスを走らせていた。

「あと少し」そう思った途端の出来事だった。
刃先が動脈に1mm程触れ、勢い良く鮮血が飛び散った。

私は目を開けた。

あの時と同じ季節、同じ風・・・何も変わらない光景・・・。
しかし、彼女だけがここには居ない。

あれから三度季節が変わり、私は、あれ以来、メスを握ることをやめた。

思考をふと、止め、花束を、思い出の海へと投げ入れたが、風の悪戯により一輪の花だけが私の頭上を越え、後ろへと、静かに舞っていった。

無意識に花を目で追い、後ろを振り返る形となる。

そして、そこには、いるはずのない彼女が立っており、花を拾い上げ、私に小さく微笑みかけた。

私は、とっさに一步を踏み出したが、

「あ・り・が・と・う」ゆっくりと口を動かし、一瞬で彼女は静かに風と共に消えていった。

今のは、私が作り出した幻想なのかもしれない……。

しかし、潮風に舞った一輪の白い花はどこにも無かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1143a/>

「一輪の白い花」

2011年1月26日15時18分発行